

プレオープン記念の特別展を開催します！

当館は、令和 5 年 10 月よりリニューアル改修のため休館しておりましたが、令和 10 年 4 月 15 日(予定)のグランドオープンに先立ち、9 月よりプレオープンを記念して特別展を開催します。新しく生まれ変わった特別展示室を会場に、リトアニア共和国の歴史と文化を紹介する展覧会と、豊臣秀吉の生涯と尾張との関わりを紹介する展覧会の 2 本を同時開催します。

また、プレオープンの開催に合わせて、本だよりも紙面を刷新し、ページ数を 8 ページに増やしました。館蔵資料の紹介や博物館の活動など、これまで以上に充実した内容でお届けします。



P.2 - 3

新しい展示室へようこそ
～作品を魅せる展示ケースの秘密



P.4 - 5

リニューアルレポート 6
インクルーシブデザインを取り入れた
常設展のリニューアルについて



P.6 - 7

資料紹介 こんどうろっ き
金銅六器



P.8

「名古屋城下お調べ帳」で歴史探索！

新しい展示室へようこそ ～作品を魅せる展示ケースの秘密

このたび名古屋市博物館は「プレオープン」を迎えることになりました。長らくリニューアル工事が続いていましたが、生まれ変わった博物館をいち早く体感していただく貴重な機会となる予定です。ここでは、「プレオープン」展の会場となる特別展示室を取り上げ、作品を展示するケースを中心に、どのような所が新しくなったのか、皆さまにご紹介したいと思います。

展示ケースの役割

そもそも博物館の展示ケースにはどのような役割が求められるのでしょうか。作品(資料)が収められるケースには、大きく分けて2つの機能が必要とされます。1つ目は「作品の安全を確保すること」です。博物館の展示資料はとてつもなく繊細なものが多く、急激な温湿度の変化、空気中の有害物質、また地震などの衝撃から守らなければなりません。2つ目は「作品の特徴や魅力をしっかりと皆さまに伝えること」です。作品が見やすいことはもちろん、質感や色味が正確に伝わるよう、ガラスの質や照明の仕様に気を

配ることが不可欠です。今回のリニューアルでは、この2つの側面について改善を目指しました。それぞれの具体的な取り組みを見ていきましょう。

作品の安全を守る

作品の膨張や収縮、また結露が起こらないよう、ケース内の温湿度は極力一定にしなければなりません。そのためには、外壁との間に空間を設けて外気の影響を避けるとともに、ケース自体の気密性を高める必要があります。博物館の展示ケースは、ケース外の空気がほとんど入らないような設計になっており、「エアタイト」と呼ばれます。一方で、気密性が高いと、ケース内で発生したガスが滞留し濃度が高くなってしまいます。ケース内で使用する展示台には、木材(合板)が使用されますが、そこから放散されるガスが、作品に悪影響を及ぼすことがあるのです。近年、化学変化による金属の劣化、絵の具の変色や退色を引き起こす有機酸^{ゆうきさん}ガスの危険性が指摘されるようになりました。そこで新しいケースでは、ガスを排出する仕組みを導入す



写真 新しい特別展示室の全景

ることにしたのです。内部にファン（換気装置）を組み込み、必要に応じて作動させることで、ケース内外の空気を循環できるようにしました。もちろん、やみくもにファンを回しては、一定に保つべきケース内の温湿度が乱れてしまいます。空調によって整えられたケース外部（展示室）の環境を見計らって、ゆっくりと循環させるわけです。さらに調湿材^{ちようしつざい}を併用することで、湿度の変化を避けながら、ガスの放出を促すというハイブリッドなケースに生まれ変わりました。こうした変化は外から眺めるだけでは分かりませんが、作品にとって優しく安定した空気環境を実現することができたのです。

作品を魅力的に見せる

一方で展示ケースは、作品を保管する収蔵庫ではなく、あくまでも見せる装置と考えられます。今回のリニューアルでは、作品をありのままの姿で、あるいはより魅力的にお見せできるようなケースを目指しました。

まずはガラスの質の改善です。新しい展示ケースでは、高透過^{こうとうか}ガラスを選択し、低反射^{ていはんしゃ}コーティングを施すことにしました。かつてはガラス特有の緑色が重なり、照明の映り込みも相まって、ケース内の作品が見づらい場合がありました。無色透明かつ反射の少ないガラスのおかげで、作品の正しい姿をお伝えできるようになったと思います。加えて以前のケースでは、ガラス扉の合わせ目にあるスチールのフレームが視界に入り、大きな作品が途切れてしまう

など邪魔になることがありました。今回は、ケース前面のガラス扉からフレームを排除し、つなぎ目の存在感をできる限り無くすように努めました。そのおかげで、屏風など大きな作品であっても、図様の連続性を邪魔されることなく楽しめるようになりました。ガラスの存在感が無くなったことで、作品に集中できるようになったと言えるでしょう。

展示ケースの性能を印象づける要素として、ガラスとともに大切なのが照明です。新しいケースでは、従来の蛍光灯^{けいこうとう}を廃して、LED照明へと全面的に切り替えました。これにより、光のコントロールがとても柔軟になりました。作品の素材や大きさ、形状に合わせて、光の量や色、当てる角度を細かな単位で調整できるわけです。別に小さなスポットライトを上に取り付けたり、アップライトを下に足したりすることで、特定の部位を際立たせたり、暗くなりすぎた下部を明るくしたりすることも可能です。展示される個々の作品に応じて、それぞれの魅力を最大限に引き出すことができるようになりました。なお点光源^{てんこうげん}であるLED照明は、一方向に真っ直ぐ進む性質から、光の質が「硬い」と言われることがあります。博物館の展示ケースでは、照明の設置個所を工夫し、拡散シートで光を分散させることで、全体を柔らかく照らすことも可能にしました。蛍光灯時代の長所も失うことなく、より便利で柔軟なケースに進化することができたのです。

おわりに

ここまで、新しくなった展示ケースについて、その具体的な中身をご紹介してきました。特別展示室ではケース以外にも、壁紙や床、天井の仕様も一新されており、今までとは異なる生まれ変わった姿をご覧いただけるはずです。しかしながら、展示ケースがどれだけきれいに、どれだけ見やすくなったとしても、それだけで作品の魅力や歴史的意義が伝わることはないでしょう。ケースは舞台に過ぎず、その中で役者（作品）が輝くには、優れた脚本と演出が欠かせません。どのようなテーマで展覧会を構成するか、作品をどのように並べるか、どの角度から光を当てるか、そしてどのようなテキストを作品に添えるのか。新しくなった展示ケースに負けないよう、我々学芸員も日々努力を重ねています。今回のプレオープン展では、講談や大道芸などパフォーマーの方々の力も借りて、歴史の面白さを楽しんでいただけるような試みにもチャレンジしています。生まれ変わった展示室で、いったいどんな出会いが生まれるのでしょうか。みなさまとお会いできる日を心より楽しみにしております。

（横尾 拓真）



写真 昔の展示ケース。フレームが鑑賞の妨げとなっている。

インクルーシブデザインを取り入れた常設展のリニューアルについて

本号のリニューアルレポートでは、令和10年4月のグランドオープンに向けて進行中の常設展のリニューアルについてご紹介します。

常設展のリニューアルにともなう展示工事は、令和6年10月に株式会社丹青社と契約を締結し、現在は展示設計の詳細をつめつつ、解説文章の作成や、展示する複製品、グラフィックの制作などをおこなっています。

常設展リニューアルでは、すべての人が見やすく、わかりやすく、楽しめる展示を実現するための取り組みとして、インクルーシブデザインを取り入れた展示工事を進めています。インクルーシブデザインとは、建物・製品・サービスなどの企画・設計・開発において、障害者や外国人、高齢者など、従来のデザインでは見落とされがちだったり、不便を感じやすい人々（リードユーザー）と共に課題を発見し、解決していく手法です。なお、展示工事に先立つ基本計画、基本・実施設計の段階においても、前者では障害者団体、後者では外国人留学生へのヒアリングをおこないました。

以下、展示工事契約後の令和7年度、8年度におこなった車椅子利用者、視覚障害者、聴覚障害者、外国語話者を対象としたインクルーシブデザインの検証内容を紹介します。なお、検証には、国立民族学博物館教授の広瀬浩二郎氏、南山大学教授の黒澤浩氏、名古屋大学博物館特任助教の梅村綾子氏に、オブザーバーとして参加いただきました。



写真 視覚障害者の方が、点字付きの解説プレートに触れて体験している。

車椅子利用者を対象とした検証

車椅子利用者の視点から、展示が見やすいものとなっているか検証するために、展示空間の一部を試作したうえで（モックアップの制作）、リードユーザーに確認してもらい、意見を聴きました。モックアップを用いた検証は、以下で述べる視覚障害者、外国人話者を対象とした検証においても採用しています。

検証でおもなポイントとしたのは、展示ステージ上のアクリルケース内に展示している資料が見やすいか、ケース内の資料キャプションが読みやすいか、壁面の解説パネルの位置や文字の大きさが適切か、展示ステージの高さ・形状が適切かなどです。リードユーザーからは、健常者と同じものを同じように見られるよう、見やすさや展示資料への近づきやすさを配慮してほしい、博物館に訪れてみたいと思うきっかけは「見やすさ」である、との意見がありました。

視覚障害者を対象とした検証

視覚障害者に対して、展示資料や解説文章の内容をわかりやすく伝える方法の検討、観覧者が実際にさわったり、

動かしたりするハンズオン展示がわかりやすく、体験しやすいものとなっているかの確認を目的として、モックアップを用いた検証を、時期を分けて3回おこないました。

1回目と2回目の検証※は、おもに二次元コード・NFCタグからスマートフォンなどを活用して、解説文章の音声読み上げをおこなう仕組み、解説文章を点字化した点字解説、展示資料のかたちや文様などが理解できるよう、線や点でそれらを表現した触図について、リードユーザーに体験してもらい、意見を聴きました。

リードユーザー、オブザーバーからは、二次元コード・NFCタグの

表示方法や位置、スマートフォンでの音声の再生方法や再生速度、点字解説のボリュームなどについて、細かな部分にまで注目した意見が数多くありました。また触図については、それがあつて博物館の展示を楽しむという感覚が得られ、非常に良いとの意見があつた一方で、触図は読み取るのにテクニック、エネルギーが必要で、数が多いと疲労につながるとの意見もありました。

3回目の検証では、1・2回目でも検討対象とした触図に加えて、土器など考古資料をモデルとした立体パズル、さわつて地形を理解する立体模型などハンズオン展示のモックアップを制作し、リードユーザーに体験してもらいました。

リードユーザーからは、立体パズルについて、その難易度にかかわつてくるパーツ数などに関する意見、地形の立体模型について、さわつて理解できる適切なサイズ感、模型上に配置する点字キャプションの表示方法などに関する意見を聴きとりました。

聴覚障害者を対象とした検証

聴覚障害者に対する、音声付きの映像コンテンツの提供方法を確認、検証することを目的におこないました。

映像コンテンツには、日本語と英語の字幕、手話通訳のワイプ映像などを設けることとなっています。検証にあつては、字幕・手話ワイプ映像の大きさ、手話通訳者の服の色、映像の場面の状況を説明する「ト書き」の有無、メインとなる映像の大きさなどに違いがある複数のサンプル映像を制作しました。そのうえで、聴覚障害のリードユーザーにサンプル映像を確認してもらい、意見を聴きました。

リードユーザーからは、日本語字幕と英語字幕の字の大きさ、デザインが同じだと、情報量が多くみえるので、字の大きさなどに違いをつけたほうがよい、ト書きはあつたほうがよいなどの意見がありました。

外国語話者を対象とした検証

外国語話者に対するわかりやすい多言語解説のあり方を検討することを目的におこないました。

検証は2段階に分けておこないました。ステップ1では、学芸員が書いた日本語の解説文を直訳した英語解説文を作成し、外国人留学生などに、その英語解説文に関するアンケート調査をおこないました。アンケート調査の参加者からは、一文が短く、直接的な英語にしてほしい、日本史の専門的な用語には説明をつけてほしいなどの意見がありました。そうした意見を踏まえて、日本語解説文をもとにした、英語解説文の翻訳に用いる日本語解説文（翻訳用日本語解説文）を作成するための指針を設けました。

ステップ2では、指針にもとづいて、新たに翻訳用日本語解説文を作成し、それを英語解説文に翻訳しました。そして、その英語解説文を用いた説明パネルなどを設置したモックアップを制作し、ステップ1の調査に参加した外国人留学生に見てもらい、意見を聴きました。参加者からは、新たな英語解説文が「わかりやすく興味がもてる内容だったか」との質問に対し、高い割合で「非常にそう思う」との評価を受けた一方、「幕府」「大木戸」「藩」など、依然として補足説明が必要な用語があるとの指摘がありました。



写真 聴覚障害者の方が、字幕付きの映像コンテンツのサンプル映像を視聴している。

以上、インクルーシブデザインの検証内容を紹介してきました。検証で得たリードユーザー・有識者の意見、また検証をとつて新たに顕在化してきた課題を踏まえて、展示設計のブラッシュアップを進め、よりよい展示を実現します。

博物館の新しい「顔」となる、リニューアル後の常設展に是非ご期待ください。
(深谷 淳)

※1回目の検証後、名古屋ライトハウス情報文化センター、愛知県立名古屋盲学校のご協力を得て、両施設においてもモックアップ検証をおこないました。



六器とは

密教修法は、壇と呼ぶ方形の台にさまざまな法具が整然と並べられ、ほとけを供養するとともに、修法の成就が祈願される。六器は、高台を有する鉢に台皿（托）がともなう6口1組の法具で、2口ずつ闍伽（水）・塗香（香）・華鬘（華）を盛り、壇上に安置される。本品は鉢と台皿がいずれも6口揃いで伝来した品である【図1】。

本品について

鉢は銅製鑄造、表面は轆轤挽で整えたのち、鍍金（金メッキ）を施して仕上げる。丈は低めで、口が外側に向かうにつれて穏やかな広がりを見せる。口縁は僅かに反り、底裏には低い高台をつける。全体的に器壁は厚めで、口縁にはより厚みをもたせている。いずれも外底には、本品の施入者名とみられる「覚存」の針書銘があり、個体によっては後世の追刻とみられる線刻銘がある【図2】。

器形内部には、内側面にわたる使用痕があり、また口縁や外側面には細かな打痕が認められ、本品が長期にわたって修法に供されていたことを物語っている。鍍金の剥落箇所における銅の銅味（地金の色）は、焦茶色を呈するものと黒味が強いものとが混在するが、これは製作時期の違いや別組の六器が組み合わせられたものではなく、同一の工房

図1 台皿に乗った金属製のわんが、6つ並んでいる写真。
銅製鑄造 鍍金（鉢）高 3.6～3.7 口径 8.7～8.8 高台径 4.4～4.5
（台皿）高 1.1～1.2 口径 8.2～8.3 高台径 5.7～5.8
*単位は cm

内における工人間の差異の範疇と考えられる。

台皿も鉢と同じく銅製鑄造で、表面を轆轤挽で整えて鍍金を施す。底裏には丈の低い高台をつける。高台は僅かに裾広がりを見せており、安定感のある造形を示す。いずれも外底には「二」の針書銘のほか、「三」と読める刻銘などが確認できる【図3】。

本品に見られる丈の低い鉢の形状や重厚感ある作風は、鎌倉時代初頭（13世紀）に製作された六器の典型的な特徴を示している。鎌倉時代に製作された六器の現存作例の多くは、様式的観点から14世紀頃の製作と考えられている。そのなかで本品は、比較的早い時期の遺品で、また鉢と台皿がいずれも散逸することなく今日に伝えられた点においても貴重な作例である。

本品は名古屋市内個人の旧蔵品で、昭和58年（1983）11月、購入によって当館の所蔵となった。本誌を愛読いただいている方のなかには、ひょっとしたらご存知の方もいらっしゃるかもしれないが、昭和59年2月に発行された「名古屋博物館だより 第36号」の「新収資料紹介」において、当時の当館学芸員・小嶋泉によっていち早く紹



図2 わんを下から見た写真。外底には「覚存」と刻まれている。



図3 台皿を下から見た写真。外底には「二」などの文字が刻まれている。

介されている。小嶋氏は、様式的観点から平安時代後期から鎌倉時代への過渡期の作とし、少し幅を持たせた判断がなされた。

科学調査を通じて

ここまで本品の様式や作風について見てきたが、次は少し違う視点から見てみよう。

美術工芸作品のなかには、分野を問わず、後世に作られた模作も少なからず存在する。現代を生きる人々にとって模作と聞くと、「ホンモノを真似て作ったもの」という方が多いだろうか。もちろん、それは間違いではない。では、なぜホンモノを真似て作る必要があったのだろうか。

修法で用いられる法具には、^{きょうてんぎ}経典儀軌に説かれる素材を使い、その手法に^{のう}則って作ることによって、ほとけは歡喜驚嘆（いわゆる覚醒状態）して靈力を増し、^{こうげん}効験や^{くどく}功德を得られるとされている。師匠と弟子の関係において正統に伝授されてきた等の特別な由緒をもつ法具は、ひとつの様式をなし、その法具の形状を忠実に模することで、原品と同等の功德を得ることを意図したのである。つまり、模作とはニセモノ（贋作）を指すのではなく、仏教美術史においては熱心な信仰、また信仰の広まりを象徴する遺産と言っても過言ではないのである。

ここでひとつの問題が生じる。それは、様式や作風から判断される製作時期と実際の製作時期との間に時間のズレが生じる場合があるのだ。

この問題を解決するためには、外観の比較検討に加えて、金属組成の確認が必要となる。すなわち、光学調査（蛍光X線分析調査）によって対象物に含まれる元素の種類と量を確認し、金属組成の面から科学的に裏付けることで、製作時期をより明確に位置付けることが可能となるのだ。本品の場合、主成分の銅以外の混合物を調べることによって、おおその製作時期が判断できる。わが国の近世以降の金工品には、^{しんちゅう}真鍮（銅と^{あえん}亜鉛の合金）が用いられる傾向があり、これが製作時期を考えるうえでひとつの指標となっている。本品に真鍮が確認された場合、中世の六器を基に、江戸時代以降に作られた可能性が高まることになる。今回奈良国立博物館のご協力のもと、本品の蛍光X線分析調査を実施した【図4】。

調査の結果、本品の材質は平安時代から室町時代の銅製品の特徴を備えていると判断された。前述のとおり、様式的観点から鎌倉時代の製作とされてきたが、金属組成の面からも当代の銅製品の特徴と合致する結果を得ることができた。すなわち、本品の製作は鎌倉時代とみてよく、科学的にも裏付けられたのである。

まとめ

従来、鎌倉時代初頭の製作と推定されてきた本品が、今回の蛍光X線分析調査によって、金属組成の面からも鎌倉時代の製作とみて^{むじゅん}矛盾がないことが確認された。加えて、鉢・台皿は各6口とも同様の金属組成の特徴を示すことが確認され、それぞれが製作当初より一具であったことが明らかとなった。伝来の情報を欠く点は惜しまれるが、鎌倉時代初頭（13世紀）に^{さかのぼ}遡る六器の貴重な遺品として今後注目されるべき作例といえるだろう。

しかしながら、今回の調査を通じて新たな問題点も見出された。それは、鉢と台皿の銅以外の含有物において差異が確認されたことである。通常、六器は鉢と台皿を1組とすることから、製作においても同一工房が同一の素材を用いるものと考えられる。しかし、鉢と台皿の金属組成には明らかな違いが確認された。つまり、両者は同時期の製作ではあるものの、異なる工房で製作された可能性を視野に入れる必要がある。仮に、当初の組み合わせが現状であったとすれば、鉢と台皿は異なる工房が担当したとみられ、当初の組み合わせが現状と異なるとすれば、製作時期の近いかつ同等の大きさの別組の六器が組み合わせられた可能性があるのだ。

本品以外でも、古来より一具をなしていたとみられる法具において、地金の金属組成に相違が確認された事例が報告されている。科学調査を通じて明らかとなった面がある一方で、目視では知り得なかった新たな問題点を提示されたのである。（伊藤 旭人）

* 詳しくは、『名古屋市博物館研究紀要』第49巻(2026年3月発行)に掲載されている、伊藤旭人・鳥越俊行「名古屋市博物館所蔵金銅六器の蛍光X線分析調査報告」をご覧ください。



図4 調査の様子。携帯型の蛍光X線分析装置を用い、ろっきにX線を照射して、金属組成を確認する。

「名古屋城下お調べ帳」で歴史探索！

「名古屋城下お調べ帳」公開

去る5月、ウェブサイト「名古屋城下お調べ帳」を公開しました（図1）。このサイトでは、江戸時代の名古屋を探索できる3つのデータベースを利用できます。

なかでも目玉は、江戸時代の名古屋を描いた古地図をもとにしたデジタルマップ「城下町の地図を調べる」です。古地図にはたくさん文字が記されていますが、読み解くのはなかなか難しい。そこで地図上の文字を書き起こし、デジタル化した4つの地図（時代別）を作り、Google マップに重ね合わせたのが、このマップです。

自分の名字で検索してみると…

よくわからないかもしれませんが、ものは試し。まずは廃藩直前、明治3年（1870）頃の地図を開き、私の名字「木村」で検索してみましょう。

すると8件の尾張藩士がヒットし、屋敷の場所にマーカーが現れました。試しに今の^{たかおか}高岳駅近くに屋敷のあった「^{きむらぶん}木村文十郎^{じゅうろう}」をクリックしてみると、その^{ろくだか}禄高や住所が表示されます（図2）。

さらに「詳細情報」をクリックすると、詳しい経歴を記したページに飛びます（図3）。それによれば、文十郎は戊辰戦争に従軍し、弾薬の管理に貢献して褒美^{ほうび}を与えられたのだとか。地味ながらも有能な人物だったようです。

お調べ帳でまち歩き

また、スマホで Google マップの現在地取得機能を使えば、今いる場所が江戸時代にはどんなところだったのか、簡単に知ることができます。



図4 スマートフォン画面に表示されたデジタルマップのスクリーンショット



図1 アイコンや検索窓、リンクなどが表示されたウェブサイトのトップページ



図2 マーカーやポップアップが表示されたデジタルマップのスクリーンショット

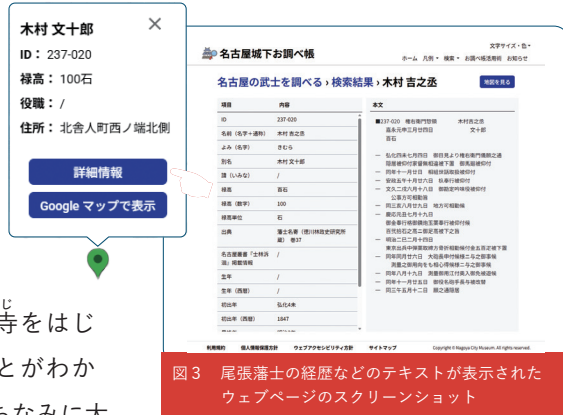


図3 尾張藩士の経歴などのテキストが表示されたウェブページのスクリーンショット

例えば、FUJI なごや科学館や名古屋市美術館のある白川公園で試してみると、このあたりは^{だいりんじ}大林寺をはじめ、いくつかのお寺の境内だったことがわかります（図4、赤いエリアが寺社）。ちなみに大林寺の「詳細情報」に飛ぶと、『尾張名所図会』の挿絵に描かれた、江戸時代の景観を見ることがもできます。

江戸時代の武士の人生に思いをはせたり、今とは全く異なる名古屋の景色を想像してみたり…「名古屋城下お調べ帳」で、あなたも気軽に、江戸時代の名古屋を探索してみては？（木村 慎平）

名古屋城下お調べ帳
<https://nagoya-oshirabe.jp/>

